

令和7年度北海道・東北体育・保健体育ネットワーク研究会 岩手わんこそばラウンド報告書



14杯目!

令和7年7月5日(土) 岩手大学 ※ハイブリット対応

参加者27名(岩手・山形・福岡・大分・鹿児島)

学生、小中高大の教員及び指導主事が校種や立場を超えて、体育授業研究事例の発表と「個別最適な学び・協働的な学びを進める上で努力を要する児童生徒への支援(手立て)」について語り合い、有意義なラウンドにすることができました。



実践発表「学習指導要領の趣旨を踏まえた体育授業研究事例」

発表①「できる喜びを実感し、進んで運動に親しむ子どもが育つ授業」

【実践校】盛岡市立仁王小学校(猪又先生)

子どもたちの気持ちや思考に寄り添い、単元計画と一緒に考え、教師と子どもがともに協働的な学びをデザインしていくという実践です。

- ①見通しをもたせるために、ラーニングマウンテンを活用し、ゴールの姿とゴールまでのルートを可視化
- ②場やグループ、ICT活用などを工夫し、友だちに目を向け、協働的に学ぶ場を準備

議論の中では、「何を私たち教師が教えなければならないのか」「どこから子どもに委ねるのか」という教える内容を明確にする必要があることやめあて学習にならないように留意する必要性が話されました。今後も、子どもたちに寄り添い、これまでの実践を改善しながら、よりよい実践が行われることが期待されます。

発表②「賢い学び手が育つ体育授業」

【実践校】盛岡市立河南中学校(熊谷先生)

賢い学び手の具体的な姿とそこに向かうための教師の授業づくりの考え方について、中学校の実際を交えながら提案していただきました。

- ①個別・専門的な知識ではなく、汎用的に働く知識や学び方を子どもが身につける重要性
- ②「知る・する・見る・支える」の面白さにたどり着くためには、種目の本質的な面白さに触れる必要がある
- ③本質的な面白さに触れさせるために素材主義を脱却し、学習内容を含む教材をどのように開発・活用し、扱うか検討する

丁寧な配慮や工夫がされている中学校での実践でした。そしてその教材の奥にある教師の意図や単元にとどまらない子どもたちの学ぶ姿のイメージを共有していただきました。



ワーク「個別最適ワークショップ」

グループに分かれて領域と学年を設定し、手立が必要とされる状況とそれに関わる資質・能力を整理しました。

授業のユニバーサルデザイン化の視点から領域でみられる子どものつまずきを想定することで、それに応じて教育方略や指導方法の工夫をすることがわかりました。全ての子どもに資質・能力を身に付けさせるために重要な視点を学ぶことができました。

新潟ラウンド 参考

個別最適に学び・協働的な学び 検討領域 ゴール型ゲーム(4年) ラインサッカー

領域	領域でみられる手立てが必要な状況	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
応用する	次の単元への接続	パスが有効(ゴールにつながるため・突破するため)	ボールを持たない時の動き パスとゴール	仲間との協力
できる	パスができない相手に届くねらったところに	ける・止める(足の部位) ボールを持たない時の動き (どこに・いつ) 意思決定	ボールを持たない時の動き (どこに・いつ)	仲間へ伝える
理解する	・ルールを理解 ・ルール上の戦術	足の部位使い方(カーテッジ) パスが有効 どこに出す? (意思決定の場)	ボール保持者と自分との間に守備者がいない (0対1活用) 相手の動きに対応	
関わる	・ルールの工夫 ゴールエリアで仲間が止めたゴール守りは手を繋いで守る 後の子への配慮	チーム内の共通理解 (話し合いの場、作戦ボード、約束事、方向性)	ボール保持者と自分との間に守備者がいない (動きで表現できない 子への評価の場の一つ)	考えたことを伝える(表現)